

論文の内容の要旨

論文題目 Поэтика стиля Андрея Платонова: перспективы риторического подхода
(アンドレイ・プラトノフの文体の詩学：レトリック分析の展望)
Poetics of Andrei Platonov's style: perspectives of a rhetorical approach

氏 名 野中 進

本論文は、20世紀ロシア文学を代表する作家の一人、アンドレイ・プラトノフ（1899－1951）の「文体の詩学」に関して、比喩と文彩を中心としたレトリック分析を通じて、その特異性と普遍性の検討を試みたものである。

序論と結びを除いて、本論部分は三部から構成される。第I部「A. プラトノフの文体の進化：メタファーとメトニミーの相関の問題によせて」では、この作家の比喩に関する全般的傾向——特に初期のそれ——が考察される。メトニミー（換喩）とシネクドキ（提喩）がプラトノフの支配的比喩だとする従来の研究に修正を加え、初期プラトノフにおいてメタファー（隠喩）と直喩が果たした役割が明らかにされる。その上で、メトニミー系の比喩表現とメタファー系の比喩表現がそれぞれ「新奇さ」と「定型性」を志向するかたちで表現様式が「進化」した、というのが本論の主張である。

第I部第一章「抒情のストック—A. プラトノフの詩と散文のジャンルの相関によせて」では、処女作である初期詩集『蒼い深淵』の比喩・文彩を分析し、それらが「定型的なメタファーに基づく抒情性の表現」を志向したものであること、また1920年代半ばに編まれた第二詩集『歌う想い』（当時未刊）においてもその傾向は変わらな

かったことを突き止めた。主題的には新しい要素（「人間としての成熟」や「果たされなかった若き日の夢」など）が導入されたにもかかわらず、比喩傾向には本質的变化が見られない。これにより、作家が詩のジャンルに求めたものが「抒情性の表現」だったことが分かる。これは、同時期に異なる進化を遂げた散文の系との対比で注目すべき点である。

第Ⅰ部第二章「プラトーフの創作の進化における抒情性と反抒情性の対立（『かつて愛しあった者たち』他）」では、前章の議論を承け、初期プラトーフの未完の中編における比喩・文彩を分析し、1920年代半ばの作家が抱えていた文体的課題について考察した。それは端的に言えば「抒情性の乗り越え」という課題であり、詩では試みられなかったことである。中編『かつて愛しあった者たち』で、プラトーフは自分自身と妻マリヤの手紙を素材に作品を構成しようとしたが、未完に終わった。その原因の一つは、自分自身の「生活の言葉」に頼るだけでは抒情性の乗り越えという課題が果たせなかったことにある。事実、作家はその後、多様な社会的言説を作中に取り込むことで、特異な小説的文体を創造してゆく。比喩レベルで言えば、新奇さに傾くメトニミー表現が1920年代後半～1930年代の小説においてドミナント（支配的要素）となる。

第Ⅰ部第三章『チェヴェングール』における直喩の反復』では、この長編小説に見られる直喩の反復という文彩を分析する。定型的な直喩が、細かな変奏を重ねつつ、幾度も反復されるのが『チェヴェングール』の特徴である。これにより「再認（一度見たものをふたたび認める）」が作品の意味創出において重要な役割を果たす。この小説では主題・プロット上も「反復」が中心的な位置を占めており（例えば、作品の最後で主人公ドゥヴァーノフはかつて父親が入水した湖に戻ってきて、自らも身を投げる）、描かれるレベル（主題・プロット）と描くレベル（比喩・文彩）の照応が見て取れる。

第Ⅱ部「プラトーフにおける伝統的文彩の意義と役割」では、プラトーフの代表作『チェヴェングール』と『土台穴』で使用される伝統的文彩と文学技法を分析した。従来、表現の新奇さが注目されることの多い作家であるが、実際には伝統的な文彩と文学技法も多く用いている。それに関する先行研究の蓄積も少なくない。プラトーフの文体の詩学を理解する上で、伝統的要素ないし定型性の問題はきわめて重要である、というのが本論の主張である。

第Ⅱ部第四章『チェヴェングール』における状況の直喩』では、この長編で重要な役割を果たす文彩「状況の直喩」に着目し、その構成と意味作用を分析した。「ホメロスの直喩」や「叙事詩的直喩」とも呼ばれ、叙事詩で頻繁に用いられたこの文彩は、近代ヨーロッパの長編小説でも重要な役割を果たす。『チェヴェングール』の場合、状況の直喩が集積してメインプロットと並行するイメージ群を形成するとともに、その

イメージ群がメインプロットに流れ込むことで、より大きな全体性を暗示するという二重の意味作用が認められる。『チェヴェンゲール』はプラトーフの唯一の（完成した）長編小説だが、その構成上、状況の直喩が大きな役割を果たしている。この観点は、第八章でも論じるように、同時代の西欧のモダニスト作家たちとの対比でも有効である。

第Ⅱ部第五章『『チェヴェンゲール』における視点の問題によせて』では、この長編における焦点化の技法を分析する。焦点化は、近代ヨーロッパ文学において発展した文学技法であり、とくに20世紀前半のモダニズム文学において自覚的・体系的に用いられた。プラトーフの場合、内的焦点化・外的焦点化・無焦点化が雑多に組み合わせられており、M. プルーストやH. ジェイムズ、V. ウルフ、F. カフカなどの焦点化の方法論的精緻さに比べて、やや「古い（伝統的な）」印象を与える。だが、その「古さ」はプラトーフが意図したものであり、焦点化方式の雑多な（非統一的な）組合せは、作品世界の多視点性をより深いものにしていく。

第Ⅱ部第六章『『土台穴』における兼用法』では、『土台穴』で顕著な役割を果たす文彩「兼用法」に着目し、原文と翻訳（英語2種、仏語、チェコ語）と対比しつつ、その構成と意味作用を分析した。明らかになったのは、プラトーフの場合、この文彩表現はメトニミー的原理に基づいており、世界の「未分化な全体」を表現するのに役立っていることである。たとえばプルーストの兼用法に関しては、メタファー的原理に基づいているという先行研究があり、同じ文彩であっても、作家によってその機能・原理が異なっていることを示す事例である。

第Ⅱ部第七章「プラトーフの文体的原理としてのカテゴリー・ミステイク（『土台穴』）」では、「プラトーフ的文体」の最高峰と目される中編『土台穴』におけるメトニミー表現について、英国の哲学者G. ライルの「カテゴリー・ミステイク」と日本の思想家柄谷行人の「教える一習う」の概念を用いて考察した。「共通の言語」を有しない人間のあいだの対話の生成と意味作用こそ、本作品のメトニミー表現が志向するものである、というのが本章の結論である。

第Ⅲ部「プラトーフの文体の形と意味：レトリック分析の展望」では、これまでの議論を踏まえつつ、プラトーフの文体の「かたちと意味」の特徴をどのように一般化できるかを論じる。その際、重要なのは、この作家の表現に見られる「新しさ」と「古さ」のベクトル、言い換えれば「新奇さ」と「定型性」の相関である。比喩・文彩の働きを考える上で新奇さと定型性の問題は中心的なものだが、プラトーフの表現はこの点で重要な研究事例をなすものと思われる。その視点に立つとき、彼を新しい文脈（世界文学、伝統主義など）でとらえ直すことも可能になる。

第Ⅲ部第八章「リアリズムとモダニズムのあいだのプラトーフ：長編小説の構成的原理としての直喩」では、直喩の使用法に注目してプラトーフとV. ウルフ、M.

プルーストの対比を行なう。第三章、第四章で論じたプラトーフの直喩の特徴（定型性、反復と再認、状況の直喩など）に基づいて、『ミセス・ダロウェイ』と『失われた時を求めて』でも同様の特徴が見られることを指摘した。また、この類似をどう説明すべきかという問いについては、20世紀前半のモダニズム長編小説において直喩が担ったジャンルの機能が指摘される。「ポスト・リアリズム」の時代、どのように長編を書くかという課題は作家にとって大きなものだったが、直喩を構成原理として用いることが三人の作家の示した解であった。すなわち、直喩は彼らの長編においてたんなる比喩・文彩なのでなく「構成原理」の役割を果たしているのである。

第Ⅲ部第九章「人は何に慣れることができ、何を忘れられないか：プラトーフの伝統主義の問題」では、この作家がごく頻繁に、かつきわめて独特な意味で使う「慣れる（привыкнуть）」という動詞に着目し、その用法の分析を通して、彼の人間観において「時間性」が持つ意味を考察した。若き日のプラトーフは社会主義建設の理想を信じ、その関連で「理念」や「計画」に基づく生の重要性は分かっていた。その一方、時間をかけて何かに慣れること、また習慣づけられた生を生きることも軽んじられるべきではないという人間観が、この動詞の用例分析から見えてくる。ここには理念と習慣、計画と慣れ、「新しいもの」と「古いもの」の葛藤がうかがわれ、近年盛んになっているプラトーフの伝統主義ないし保守主義の議論に資するだろう。

第Ⅲ部第十章「表現はいかにその形を得て、人を慰めるか：プラトーフの手紙の一節によせて」では、作家の妻宛ての書簡に一度だけ現れる表現（「大地を通して彼[一人息子のプラトン]にキスしてくれ」）をめぐり、それがどのような意味で「新奇」と言いうるか、またそれがどのように「出現」したかを考察した。明らかになったのは、戦時中の妻宛ての書簡には「死んだ息子のための配慮」を求める表現がくり返されており、その表現系列の果てに上述の表現が現れるというプロセスである。簡単に言えば、より定型的な表現の反復・変奏を通じてより新奇な表現が現れる、というのがプラトーフの「文体の詩学」に他ならない。同時期に書かれた短編でも同様の傾向が確認される。

以上のように、本論文は、比喩と文彩を中心としたレトリック分析を通じて、特異な文体と世界観を打ち立てた作家アンドレイ・プラトーフにおける「かたちと意味」の結びつきを考察し、その特殊性と普遍性を明らかにしたものである。